能面少女と残念な王子様

吹雪桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
能面少女と残念な王子様

【Ｎコード】
Ｎ７３２８Ｕ

【作者名】
吹雪桜

【あらすじ】
「ここで王子様助けてあげたら王子様手伝ってくれる？」
気がついたら行き倒れていた国民のアイドルな王子様と、元の世界に帰りたい少女の話。

いちわ。（前書き）

ギャグっぽいのが書きたくなりました。
しかもストーリーが決まってない行き当たりばったりな話です。
ご注意ください。

いちわ。

「やっほー、王子様」

うつぶせた体勢のまま顔だけ上げたのは、頭に影が差したのからだ。顔を上げた先にいたのは一人の少女。黒髪と紫の目の全身黒尽くめの少女。

少女は無表情で手を振っている。悪いが、振り返す気力も体力もない。

ぽて、とまた地面とお友達になる。ああ、意識が薄れてきた。これ目覚めるのかな。

「わお。王子様限界？限界なわけね。はいはーい」

少女はまた無表情なのだろうか。無表情でその口調ってなに。気になって意識が完全に落ちない。いいことなのかどうなのか。っていうか、さりげに余裕ないか？俺。

こんなだから母上に、あんたは本当残念な美形ね～とか言われるんじゃないか？いや、関係ないかこれ。

「ね、王子様。でっどおあらいぶ」

…は？

いきなりたどたどしくなったな。

「私ね、家に帰りたいんだけど、帰り方分からなくて。ここで王子様助けてあげたら王子様手伝ってくれる？くれる？く～れ～る～う

？」

何か今イラッときた。
その苛つきを力に、片手をというか、手首だけ持ち上げて、ばんっと地面を叩いた。いや、実際にはぱすっとか言ったけど。っていうか地面にしては柔らかいんだけども。

「…王子様さあ、乙女の足をなんだと」

乙女の足？

「ま、いいや。了承ってこと？おっけーってこと？いいよーってこと？」

何が。

「じゃ、助けたげる」

まてまて、俺は何も言ってない。言う元気もないが。
ってか、ちょっとまて。頭を持ち上げるな。ぐぎっていった。首がぐぎって。しかもこの体勢辛い。マジ辛いから。

「…んっ！？」

柔らかい感触が唇に。舌にまで感じる柔らかい…って、待て。本当に待て。
ごくん、と喉がなった。飲んだのは何だ。唾液とかじゃないよな？
お嬢さん、君ね、初対面の男相手にこんなことしちゃだめだろう。
もっと自分を大事にしなさい。

とか思いながら、舌絡め返してるのは俺のせいじゃない。
いつのまにか力を取り戻した腕が少女の頭を支えてるのも俺のせいじゃない。
うん。
悪かった。

「…っ、はっ、ぁ…お、王子、様。あの、ね」
はあはあと息が荒い少女が地面に懐いている。
俺はうつぶせの体勢のまま項垂れている。
「初心者相手にこれはないと思うの」
「すみませんでした」
その初心者のたどたどしい舌の動きに燃えてすみません。萌えかもしれない。とにかくぞくっときたんだ。
「うぅ…うごけない…」
本当すみませんでした。

にわ。

アディアード王子とは金髪碧眼の美形。これぞ王子という想像が具現化したような人だ。

という噂。
一家に一枚、王子の絵姿が飾られ、朝な夕な拝まれている。本当の話。私は見た。
うちにも一枚あるけど、これは持ってないことを知った古着屋のおばあちゃんが、鬼気迫る勢いで私の手に握らせたから。

それはだめじゃよ。王子の微笑みはばば達の守り神じゃ。王子に始まり王子に終わるのがばば達国民の一日の過ごし方じゃ。カノン、なんと可哀想な。不憫な子じゃ。ほら、これをやろう。ばばのことは気にせんでええ。来週の新作を買う理由ができたからの。

…あれ？これって親切？おばあちゃん、新作ほしかっただけじゃないの？気のせい？
まあいいや。そういうわけで、国民のあいどるアディアード王子の顔は乳児だって知ってるっていう浸透ぶり。凄いね、王子様。

その王子様が行き倒れてた。ぼろっぼろで。
え？なに。命狙われてる系？それとも行き倒れ系？じっと見てるだけじゃ分からないのでとりあえず声かけてみた。で、ついでに取引してみた。みた。みた。うん、みた。

「王子様、キスで人殺せるねえ」

「殺せません」

でもごめんなさい。
しゅんとした王子様に背負われて、ただいま家路についてます。
立てないんだ。腰立たないんだ。キスで腰砕けるとか漫画でよく見たけど、本当なんだ。あれ過剰描写じゃなかったんだ。意識もとぶかと思った。
それにしても。

「まさかやり返されるとは…」

私の唾液には力があるらしい。唾液ひとつで元気になりまーす、な感じの。唾液に限らないんだけども。血とかね。あれもいいらしい。でも切るの痛いし。だからちょっとキスしてみた。人工呼吸だと思って。
恥ずかしかったよ。だってふぁーすときすだもん。しかも王子様美形だもん。王子様が死にかけてなかったらやらなかったよ。なのになのになのにいいい。

「うう…てくにしゃん」

死にかけてた人にやり返された。
私、恋人できた時大丈夫かな。満足できるかな。王子様キス上手すぎだよ。
あ、あれか。ぷれいぼーいか。皆のあいどるアディアード王子様は実はぷれいぼーい。

「ぷれいぼーい」
「…別に遊んでるわけじゃ」

項垂れた王子様は、いや、でも本気じゃないとやっぱ遊んでることに？と呟きつつ、だんだん暗くなってきた。おや、これは何か地雷か？よしよし、と頭を撫でてみた。

さんわ。

何をしてるんだろう。
出されたお茶を飲みながら思う。

目の前でお茶を飲んでる少女はカノンと名乗った。花の音と書くのだというのはいまいち分からない。何を書くんだ？
腰が抜けたカノンに案内されるままに辿りついた一軒屋。そこに招かれ、淹れ方を教わって淹れたお茶は美味しい。自分で言うのもなんだけれど美味しい。才能があるのかもしれない。

そんなことを思いながらお茶を飲んでいて気づいた。カノンは倒れている俺に言った。家に帰りたいけど帰り方が分からないの、と。
…ここじゃないのか？自分で案内して鍵開けてのんびりしてるここじゃないのか？
思わず首を傾げた。

「でね、王子様。隣の大陸に現われた勇者の話知ってる？」
「うん？勇者…って、ああ。第一王子自ら旅の共についていったっていうあれ？」
「そー。それそれ」

隣の大陸と言っても、間にいくつもの島を挟んでいるため結構遠い。そのせいか交流もない。それでも大陸を渡る商人や旅人から流れる噂はある。その中の一つが今言った勇者の話だ。

この大陸は案外平和だが、隣の大陸はそうでもない。突如として現われた魔王とその手下である魔物との戦いが歴史に残るほどに繰り

返されている。
不思議なことにその大陸以外に魔物が現われたことはない。隣の大陸だけだ。何だ。何かあるのか。呪われてるのか。
実際はどうなのかは知らないが、とりあえずそういうわけで今の大陸中一の大国オーランスを先頭に魔王軍との戦いが繰り広げられている。

どちらが有利かといえば魔王軍。人間側は苦しい状態に追いやられた。
そんな中に現われたのが勇者だ。

「隣の大陸が信仰する女神オーランディアが寄越した救世主で、不思議な力を使って侵攻してきた魔王軍を退けた…確か、年端もいかない少女だって聞いたな」
「私より三つくらい上じゃないかな。高校の制服着てたし」
「……うん？」

何の話。

「その勇者が召喚されるのに巻き込まれたのが私だったりするの～」

表情が少し動いたくらいにしか見えなかったが、恐らくにっこり笑

顔、なのだろう。それに思わず笑顔を返した。

＊

あれはどしゃぶりの雨の日だった。
ねえ、馬鹿なの？死ぬの？そんなふうに自分を罵った日、傘を忘れた私は走っていた。
私以外のくらすめいとが傘を持ってきたにも関わらず、忘れた私はやまない雨に痺れを切らして走っていた。家に帰ったらしゃわーだ。お風呂だ。お母さん、お風呂沸かしておいて～！とてれぱしーを送りながらばしゃばしゃ音を立てながら走って。
寒い冷たい瞬間移動したい～～～！！そんな心の叫びを上げた時、私はちゃんと傘を差してる女の子とすれ違った。その時だ。
「いきなりその子の足元から光が射してね、は？と思って振り返ったら目の前真っ白になって」

驚いた顔の女の子と目が合ったのは覚えてる。
その後は知らない。気がついたら森の中にいた。

「……え、と？」
「そこでお師匠様に拾われて、どうやら召喚に巻き込まれたってことが分かって」
「まて。ちょっとまて」
「は～い」

アディアード王子様は額に手を当てて、空いてる方の手のひらをこっちに向けた。
うん。これ嘘？本当？妄想？みたいな感じ？

「つまり、勇者と同じ世界の人間？」
「うん」
「女神が勇者を召喚したのに巻き込まれて？」
「そう」
「お師匠様に拾われた？」
「まんまだねえ」

そんなことあるのか？いや、でも、とこっちを見た王子様は、そういえば時々発音可笑しいもんなあと呟いた。
うん。そう。基本すらすらしゃべれるんだけども、時々舌ったらずになる。
この世界はいくつも国があって大陸もあるのに言語は統一されてる。謎だ。何で統一されてるの。可笑しくない？
お師匠様に突っ込んだら、そういうものだから納得しなさいと言われた。きっとお師匠様も知らないんだ。
まあ、そういうわけで、言語が統一されてるんだから私のような話し方になるのは可笑しい。

「…とりあえず、続きをどうぞ」
「はあい。でね、そういう感じで世界を渡っちゃったから、帰り方分かんなくて。お師匠様も専門外だって言うし」
「お師匠様って何の？」
「魔法」

魔法使いです。お師匠様。普通にいるみたいです。魔法使いって。魔法使いは国に申請して名前登録しないと指名手配です。魔法は使えない人からしたら対抗のしようもないから、ちゃんと国が管理しようってことらしい。私もしてます。登録。

「だから召喚魔法なんてお師匠様の管轄じゃないって思ったんだけど、人が使えるものじゃないんだって」
「なら俺なんてもっとダメだろ」
魔法使いじゃないし、と眉を寄せた王子様に、ううん、と首を横に振る。
「王子様じゃないとだめなの」
「俺？」
そそ、と頷けば、こて、と王子様が首を傾けた。…何か可愛らしい仕草が似合うな、王子様。かっこいいくせに、可愛らしい仕草も制覇とか。ちくしょう、美形っていいな…。
なんてことを思いながら、両手を胸の前で組んで王子様を見上げる。

「血、ちょうだい？」

よんわ。

……。

はっきり言おう。可愛かった。くらっときた。

だってそうだろう？無表情だけれど可愛らしい少女が胸の前で両手を組んで、縋るように潤んだ上目遣いでお願いされればくる！くらっとくる！！

が、しかし。

「……血？」

そのお願いの内容は物騒だった。

血？血って血液か？血液？誰の？俺の？え？何で。何に使うの。

「どばっとほしいわけじゃないよ？ちょっとでいいの。ちょっと。えーと、これくらい」

どんっと目の前に置かれたのはコップ。俺の手のひらにはちょっと小さい、カノンの手のひらには丁度。そんな大きさのコップ。

…十分多いだろう？これ。

「あ、別にナイフで切れってわけじゃなくて、注射器あるから、それで吸い取らせて？」

「問題はそれじゃない」

いやいや、それも問題だけれどもだ。まず教えてくれ。こんな大量の血がどうして必要なのか。生贄の儀式とかああいうのか？何か願いが叶う系なのか？いやだな、そんな願いの叶え方。っていうか、そんなに血を抜かれた俺はどうなるんだ。大丈夫なのか。

カノンは、王子様顔色悪いよ？と首を傾けた。普通悪くなるだろう。ならないなら、そいつはどんな神経だ。

「カノン」
「なに？」
「使い道は何だ？」
「元の世界に帰るためにいるの」
「俺の血が！？」

何。俺の血って何！？
異世界召喚は人間ではできない領域だ。なら帰すのもまた人間ではできない領域。にも関わらず、帰るために必要な俺の血って何！？
何で構成されてるんだ！？
今、この体の中を流れる血に恐怖を感じたのは当然のことだと思う。

「お師匠様が言うには、王子様って特殊なんだって」
「特殊！？」
どこにでもいる人間だろう、俺！そうだと言ってくれ！特殊って何！？
「ほら、この国って王子様フリークでしょ？王子様フェチでもいいけど」
王子様マニアにしようか、とか真剣な顔で悩まないでほしい。考えないようにしてるんだから。
国中に俺の絵姿が売られてるとかさ。本人にしてみたら怖いんだよ。
何それって恐怖なんだよ。
しかも、だ。最近は絵姿だけじゃなくて、何かグッズ販売しようか、なんて案が出てる。
俺の意見は総無視だ。当人の意見無視で会議は進む。必死に反論しても、最後には母上に猿轡噛まされて、椅子にロープでぐるぐる巻きだ。
目の前で交わされる俺の絵姿グッズ考案。抵抗虚しく、進められていく会議。

泣ける。涙が出てくる。

せっかくそんな綺麗な容姿に生まれたんだから、有効活用しなさいな。これも国のためよ。あなたのその顔一つが国と国民の一体化に役立つのよ。

息子を何だと思ってるんですか、母上。国庫が潤って笑いが止まらないわ、って小さく言いましたよね？どれが本音なんですか。

「…くっ」

「…何で泣いてるの、王子様」

ちょっと待って。涙が止まらなくなった。

＊

突然泣き出した王子様から、俺の顔って一体、とか。俺は金のなる

木か、とか。残念な美形ならそれなりに普通の生活を送らせてくれ、とか聞こえてくる。
どうやら顔で苦労しているらしい。美形って得だけじゃないんだねえ。ふと見えた戸棚の上。飾られた王子様の絵姿。
……絵姿だけでは分からなかったけど、王子様って何か噂と違うよね？
くーるだとか、慈悲深いだとか、美しくて賢い我が国の宝、とか聞いたけど、王子様くーる？くーるかな？
何か泣きながら、顔に似合った性格って何、どんな、あれ結構疲れるんだけど、とか言ってるから、演技？だとしたら凄いよねえ。王子様、演技力抜群ってことだよね？

よしよし、と王子様の頭を撫でながら感心する。
一国の王子には演技力も必要なのか。なるほど。って、王子様、髪さらさら。いいなあ。
思わず身を乗り出して両手で髪を触る。おお、何かいい感じ。

「……何してるんだ？」
「あれ？」

下から聞こえてきた声に我に返る。
泣いてた王子様慰めてた私はどこに行った。ちょっと気まずいなあ、と思いながら下を向けば、机につっぷしてた王子様が顔を上げた。
あ、涙。思わず拭えばびっくりした顔。そしてかああっと顔を赤く染めて、くそ、しくじった、と自分で涙を拭った。

「王子様、かわいいねえ」

ごんっと王子様が机に頭をぶつけた。

あ、綺麗な顔が。
顔を上げた王子様は涙目だ。痛かったのか、それともさっき泣いてたせいか。分からないけれど涙目だ。
額が赤い。

「かわ、いい？」
「男の人って時々可愛いんだって。お母さんが言ってた」
「う、れしくない」
「そなの？」
でも本当に可愛いのになあ、と首を傾ける。
うれしくない、とまた王子様が言った。でも何でか机に懐いた。初めて言われた。小さな呟きに、え？と聞き返そうとしたけど、王子様が顔を上げて、それで、と言った。
「俺の血が何？」
「血？」
何が血、と言いかけて、ああ、と思い出す。そうだ。その話をしていた。
ぱんっと手を合わせると、忘れてたのか、と王子様がまた机に懐いた。

「王子様ってね、国中に愛されてるでしょ？でもね、それって神様にも愛されてるんだって」
「は？」
この国に信仰する神なんていないぞ、と王子様が顔を上げた。
それにうん、と頷いて、えーと、とお師匠様に教わったことを思い出す。
「王子様が生まれた時ね、ちょうど通りがかった神様がいたんだっ

て」
「通りがかった…？」
「うん。ちょっとふらふらーっと。でね、王子様見てね、一目惚れ」
「はあ！？」

お師匠様はそう言ってた。
一目惚れですよ、あれは一目惚れ以外の何者でもありません。いやあ、面白…驚きましたよ。
そう言ってた。言いなおしたけど、ちゃんと聞こえたから、お師匠様。面白かったって言ったよね？面白かったんだよね？お師匠様。

「それでね、王子様にちょちょいっと」
「何したんだ！？」
がたっと立ち上がる王子様の顔は真っ青だ。
「神様の恩恵を授けたんだって」
「恩恵？」
それは何だ、と身を乗り出す王子様。
…顔近い。近いから、王子様。そんな綺麗な顔近づけないで。どきどきするから。ほら、心臓がどくどくと…言ってないけど。
これって絶対お師匠様のせいだよねえ。お師匠様も綺麗な顔してたもん。綺麗な顔と丁寧な言葉遣いで、でも性格悪かった。乙女の夢を木っ端微塵。酷いや。
そのせいで綺麗な顔見ても心臓が大人しいんだ。絶対そうだ。ちくしょう。

「王子様ね、神様召喚できるんだって」

「……召喚は神の領域、だろ？」
「だから神の恩恵」
「俺、人間だよな？」
「だから神の恩恵」
「人間に召喚なんて…」
「だから王子様の血が特殊って話に繋がるの」

ナンデ、と王子様がカタコトで言った。
目が揺れてる。聞きたくないけど、聞かないのも怖い。そんな感じ。
それにとりあえず、お茶をどうぞ、と王子様が入れてくれたお茶を勧める。王子様は糸が切れたまりおねっとのように椅子に座って、ぎごちなくお茶を飲んだ。
こくり、と王子様の喉をお茶が通っていくのが見えた。…ちょっとぞくっとした、のに。

「ごほっ」
「…何で一気飲み」

一気に飲みすぎてお茶が可笑しなところに入ったらしい王子様が、げほごほと咳をする。側に寄って背中を撫でながら、王子様ってちょっと残念だよね、と思った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7328u/

能面少女と残念な王子様

2011年9月12日10時19分発行